

サビエル生誕五百年

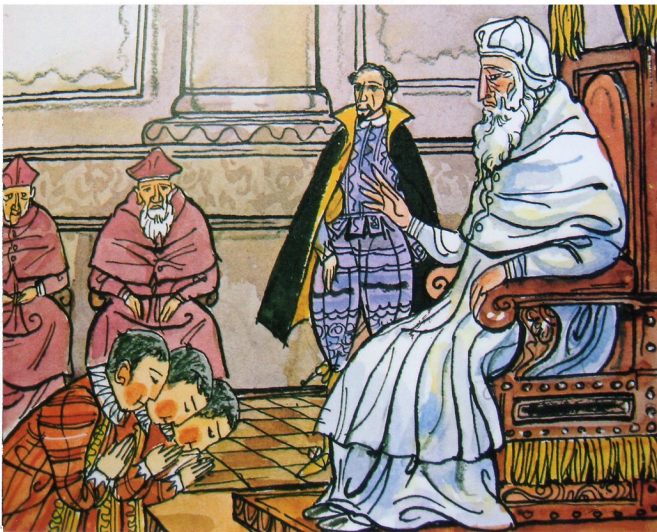


巡礼の道

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

65

悲劇の天正少年使節



教皇グレゴリウス十三世に謁見する

少年使節―「日本の教会」から

ポルトガルの南部、アレンテージョ地方の中心都市エボラは世界遺産にも指定され、ローマ時代から栄えた歴史の街である。

城壁で囲まれ、神殿、司教座聖堂、修道院、大学などの建築物があり「博物館都市」とも言われている。これらの歴史的建造物とともに、この街には日本のカトリック信徒にとって特別の思い出がある。

サビエル来日から三十三年後の一五八二年、九州のキリシタン大名たちは四人の少年

をヨーロッパに派遣した。「天正遣欧少年使節団」である。

実は、この少年たちは一五八四年九月に、八日間だが、このエボラに滞在した。

十二世紀から十三世紀にかけて建てられたエボラの聖堂には当時、ヨーロッパに二台しかないイベリア・パイオルガンがあった。

これは扱い方が非常に難しく、世界中でこれを弾ける人はわずかであった。

ところが、そのオルガンを使節団の二人の正使、伊藤マンシヨと千々石（ちぢわ）ミゲルは見事に弾いたと伝えられている。

パイオルガンは今も聖堂の中にあつた。妻と二人で聖堂のベンチに座り、少年使節団に思いをはせた。

日本人として初めてローマ教皇に謁見して日本の教会への援助を依頼し、同時に日本に

はあまり知られてないヨーロッパ文化を伝え、日本人にキリスト教をより正しく伝えることが目的であった。

一方、マルコ・ポーロの東方見聞録に始まり、ポルトガル人の種子島漂着、サビエルの日本紹介の手紙などにより、未知の国、日本への関心は強まっていた。

その国からはるばるやつて来た四人の少年たちはローマ教皇やスペイン国王に謁見したのをはじめヨーロッパ各地で大歓迎を受けた。

このエボラでも、大司教から歓迎され、エボラ大学の学生と交歓したという記録が残されている。

何年もかけてヨーロッパ文化を吸収し、当時、日本にはなかつた印刷機械の技術も習得し、世が世なら英雄として帰国し、栄光の人生が約束されていた。

ところが、少年たちが日本を出発して五年



少年使節が弾いたパイオルガン

後の一五八七年、秀吉によりキリスト教禁止令が出され、八年後に帰国した時、活躍の場はなかつた。

それどころか、迫害が始まり、千々石ミゲルはキリスト教を捨てた。供として同行した原マルチノ、中浦ジュリアンは伊藤マンシヨとともに司祭になるが、伊藤は病死。原も追放先のマカオで病死した。

中浦ジュリアンは十九年間、潜伏司祭として活躍するが、逮捕され、拷問の末、穴づり

の刑で殉教した。

彼らには何の罪もない。歴史の巡り合わせとはいえ、あまりに過酷な人生である。

ふと、エボラ聖堂正面のキリストの十字架像が目に入った。この不条理は、キリストの十字架上の死と重ね合わせて初めて信仰へと昇華できるのだ。と、後ろから少年が弾くパイオルガンの音が聞こえたような気がした。
(元山口放送取締役ラジオ局長)